

TOBUNKEN NEWS

2008
no.34



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

モンゴルにおける拠点交流事業 (予備調査)

今年度から始まった拠点交流事業の準備として、6月9日から14日までモンゴルを訪れました。本事業では本研究所の無形遺産部とともに、組織や法律など文化財保護の枠組みに関するワークショップの開催や、教育文化科学省所管の国立文化遺産センターに対する専門家育成のための研修事業を計画しています。教育文化科学省文化芸術局長との会談は、事業開始にあたって当研究所との合意書と覚書の締結を快諾していただくなど、友好的な雰囲気終始しました。

また、首都ウランバートルの北方約350kmにある、モンゴル最大級の木造建造物であるア

マルバヤスガラント寺院を視察しました。この寺院では、1970年代初めから80年代半ばにユネスコを通じて派遣された日本人専門家による調査や修復事業が行われました。しかし現在は管理が不十分で、教育文化科学省の専門家は、緊急対応を要すると話していました。たしかに、屋根や彩色だけでなく構造上の劣化も発生している状態でした。ここでの議論を通じて、両国は、来年度以降実施する専門家養成に建造物関連の内容も含めたいと考えるようになりました。

さて、6月末の総選挙の後、ウランバートルでは結果への不満を表すデモが暴動化し、当研



アマルバヤスガラント寺院



アマルバヤスガラント寺院の視察

究所のカウンターパートとなる文化遺産センターも焼き討ちに遭い、建物や機材、文化財が被害を受けました。関係者にお見舞い申し上げるとともに、大使館や関連分野の専門家と情報を共有し、緊急対応の可能性を探っているところ です。

(文化遺産国際協力センター・二神葉子)

文化財アーカイブの構築と その発信に向けた新たな取り組み

質の高い文化財情報を多くの人々に簡単に利用してもらうにはどうすればよいのか。研究所の文化財アーカイブと情報発信機能を担う企画情報部が今回出した回答が、美術図書館の横断検索サイト“ALC (Art Libraries' Consortium)”および連想検索サイト「想 (Imagine)」への参画です。これらが実現すれば、将来、美術図書館の横断検索サイトからは定期刊行物等所載の古美術・近現代美術文献を、また連想検索サイト「想 (Imagine)」からは『日本美術年鑑』に掲載してきた近現代美術展覧会開催情報、年史、物故者記事などのデータを検索することができます。

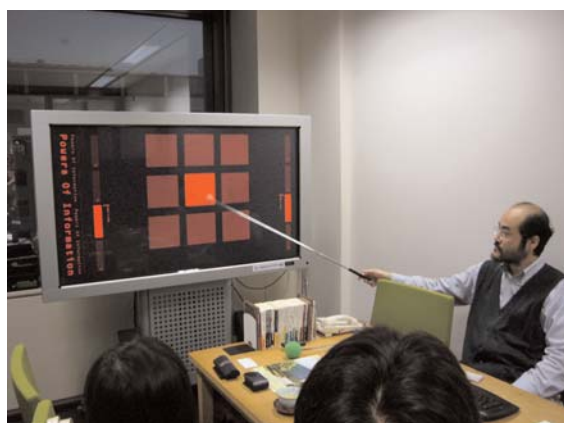
企画情報部はこのプロジェクトの実現に向けて、4月22日に水谷長志（東京国立近代美術

館）、丸川雄三（国立情報学研究所）の二氏を講師に招き、文化財情報の発信と連携についての研究協議会を開催したほか、6月9日には田中淳、山梨絵美子、津田徹英、中村節子、そして勝木の5人が、国立情報学研究所連想情報学研究開発センターを訪ね、高野明彦氏や丸川雄三氏と、文化財情報の発信に関する今後の取り組みについて意見を交わしました。今後も研究所がこれまで蓄積してきた研究成果をより有効にご利用いただくための情報発信のあり方を模索していきます。

(企画情報部・勝木言一郎)

黒田記念館研究室の公開

➤ れまで黒田記念館では、2階の記念室、
↳ 展示室の2室において黒田清輝作品を公開してきました。4月24日からは、2階、1階の旧研究室も一般公開をはじめました。2階の旧研究室では、「黒田清輝の生涯と芸術」（上映時間約12分）と題したスライドショーを上映し、来館者に黒田の芸術への理解を深めて



高野教授によるレクチャー



アンソニー型カメラの展示 撮影：鳥光美佳子



1 階旧研究室 撮影：鳥光美佳子

いただくようにしました。さらに1階の旧研究室2室では、美術研究所時代当時の木製机、キャビネット、写真カード、西洋古典美術の複製絵画、撮影機材等を展示し、あわせて東京文化財研究所の最新の成果刊行物を自由にご覧いただけるようにしました。これに加えて、このコーナーでは、戦前の美術研究所において美術作品等の調査撮影のために使用されていたアンソニー型カメラを修復して展示しました。同型のカメラは、アメリカより20世紀前半に輸入されたものを原型にしたもので、このカメラによって撮影された数々の文化財は、今日では貴重な記録となっています。展示にあたっては、レンズを窓外に向けて、ガラス面に戸外の風景が逆さに映るようにしました。これによって、黒田作品の鑑賞に加えて当研究所の歴史と現在を紹介できるようにしました。

(企画情報部・田中 淳)

特別史跡・キトラ古墳壁画の 保存修復

東京文化財研究所では文化庁からの受託事業で、「特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務」を行っており、その中で、石室内の定期点検や壁画の取り外しなどを進めています。

キトラ古墳壁画（天井天文図）
北半分を取り外した後

特に天井天文図では、2007年7月に一部のはく落が確認されて以来、順次取り外し作業を進めてきました。最初は、落下の危険性が極めて高い部分を、小さな範囲で取り外しておりましたが、取り外しに使う道具類の改良などにより、現在では一辺10cm程度の壁画片を取り外すことが可能となりました。その結果、2008年6月末には、^{けいしゆく}奎宿および外規北側を取り外し、南側半分を残すのみとなっています。今後、定期的に取り外し作業を継続し、天井天文図については今年度中に全て取り外すことを目指しています。

(保存修復科学センター・森井順之)

国際研究集会 「オリジナルの行方」に向けて

企画情報部では今年12月に開催する国際シンポジウム「オリジナルの行方—文化財アーカイブ構築のために」に向けて準備を進めています。5月9日には、加藤哲弘氏（関西学院大学）をお招きして研究会を行いました。山梨絵美子の「美術研究所とサー・ロバート・ウィット・ライブラリー」と題する当所の成立と1920年代の西欧社会における美術史資料環

境に関する発表、西洋美学の分野で「オリジナル」の問題がどのように語られてきたかについて加藤氏の『『オリジナル』であることをめぐって—美術研究に対するその意義』という発表の後、“オリジナル”をめぐってディスカッションがなされました。“オリジナル”であることが希求されるのは西洋でも19世紀以降であること、そうした時代を背景としながら19世紀末に活躍した美術史家アロイス・リーグルは必ずしも文化財の当初の姿のみに価値を見出さず経年的価値を認め、アーウィン・パノフスキーは複製が真正性（アウラ）を欠くことを指摘して文化財そのもの（オリジナル）と複製を区別したことなどが加藤氏によって指摘され、“オリジナル”の記録と記憶の質の違い、“オリジナル”を残す行為は何を伝えていくことか、などについて議論が交わされました。

様々な角度から考え、議論を深めることにより、シンポジウムの充実を図るとともに、文化財に関する調査研究、資料の蓄積と公開という日常業務のあり方についても考える機会としたいと思います。

（企画情報部・山梨絵美子）

梅村豊撮影歌舞伎写真の整理

梅村豊（1923年6月15日～2007年6月5日）氏は、雑誌『演劇界』のグラビア頁を長く担当されていた写真家です。昨年12月、無形文化遺産部は、故人の遺されたネガや写真の一部を、未亡人にあたられる宣子氏からご寄贈いただくことになりました。現在、およその点数を把握するための整理をしています。今年度中には、正式に東京文化財研究所への寄贈手続きを完了したいと考えています。

故人の写真が最初に『演劇界』に掲載された



ネガ整理の様子

のは昭和22年だったそうです。ご寄贈いただいたネガ・写真は、昭和37年頃に撮影されたものが最も古いようですが、それでも研究所に搬入する時点で、ダンボール箱で10数個に上る膨大なものでした。20世紀後半の歌舞伎を撮り続けてきた写真家の貴重な記録です。

（無形文化遺産部・飯島 満）

タジキスタン、アジナ・テパ 仏教遺跡保存プロジェクト

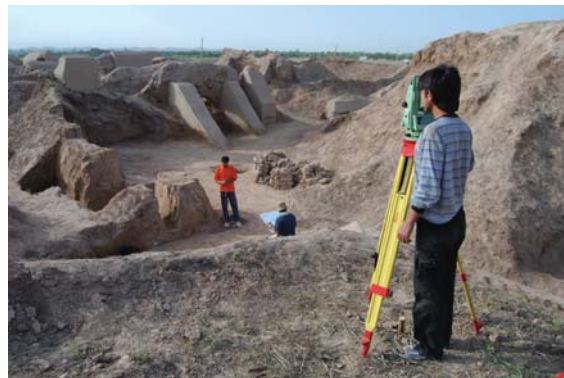
文化遺産国際協力センターは、4月16日から5月9日にかけて、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタン、アジナ・テパ仏教遺跡保存プロジェクト」の第3次ミッションを派遣しました。本プロジェクトの目的は、日干しレンガや練り土といった土構造物で構築された仏教寺院を保存することであり、文化遺産国際協力センターでは、過去の発掘調査以後に堆積した土砂や雑草を除去し、あわせて寺院本来の壁の位置や構造を明らかにする考古学的清掃や試掘調査を2006年より実施してきました。

今回の調査では、ストゥーパ（仏塔）のある中庭に面した南東の壁を精査し、涅槃仏のあった部屋へとつづく入口を確認しました。また、

遺跡の縁辺部2カ所で試掘調査を行ったところ、それぞれで仏教寺院の外壁を検出することができ、仏教寺院本来の範囲を確認することができました。こうした成果は、遺跡を保存する際に重要な情報になります。なお、現地で実施されたすべての考古学調査は、タジク人の若手考古学者と共同で行われ、私たちが調査を実施する上で大きな助けとなりました。同時に、現地専門家の育成という点においても、意義のあるものになったと思われます。



調査によって明らかになった
ストウパのある中庭に面した東南の壁



タジク人専門家との共同作業の様子

(文化遺産国際協力センター・有村 誠)

国立韓国伝統文化学校との文化交流に関する協定の締結

5 月13日、東京文化財研究所と国立韓国伝統文化学校の間で、文化交流に関する

協定が結ばれました。協定は包括的な交流の推進に関するもので、韓国伝統文化学校と当研究所が、学術研究、教育の分野における文化交流を実施することにより、文化遺産保護の促進に資することを目的としています。

国立韓国伝統文化学校からは李鐘哲総長をはじめとする4名の方々を迎えて、当研究所において調印式が行われ、大勢の研究所職員が見守る中、総長と鈴木規夫所長により文化交流協定書に署名が交わされました。

国立韓国伝統文化学校は、大統領府に基づいて伝統文化の保護・伝承を目的とする大学として設置され、文化財管理、造園、建築、美術工芸、考古、保存科学の6学科から成っています。今後、幅広い分野に渡っての総合的な交流が期待できます。



国立韓国伝統文化学校一行との記念撮影

(管理部・後藤喜信)

在外日本古美術品保存修復協力事業における修復作品の展示

保存修復科学センターでは、5月13日(火)から25日(日)まで、東京国立博物館平成館企画展示室において平成19年度在外日本古美術品保存修復協力事業において修復が終了した、屏風(6曲1双)2組、掛幅3幅及び漆工品2作品を展示しました。また、会

場内には、絵画及び漆工品の修復過程を紹介したパネルも展示し修復作業の様子が分かるようにしました。いずれの作品も、所蔵館において展示可能な状態に修復されており、当研究所の国際貢献・協力を皆さんにご理解いただく良い機会となりました。今後もより一層の国際貢献・協力を寄与すべくこの在外日本古美術品保存修復協力事業を推し進めてまいります。



東京国立博物館平成館特別展示室の展示

(保存修復科学センター・中山俊介)

「無形文化遺産の保護に関する 日韓研究交流」合意書の締結

➤ の合意書は、2005年に締結された「日
➤ 本国独立行政法人文化財研究所・大韓
民国国立文化財研究所研究交流協約書」に基づ



日韓研究交流合意書の締結

いて、当研究所の無形文化遺産部と韓文研の芸能民俗研究室との間で、無形文化遺産分野での研究交流について具体的に定めたもので、去る6月3日に韓国の文化財研究所において署名締結されました。今後はこの合意書にしたがって、研究員の相互訪問・研修等を行い、今後の共同研究の実現に向けての協議を行うとともに、それらの成果を2010年度末に共同論文集として刊行することが決められました。

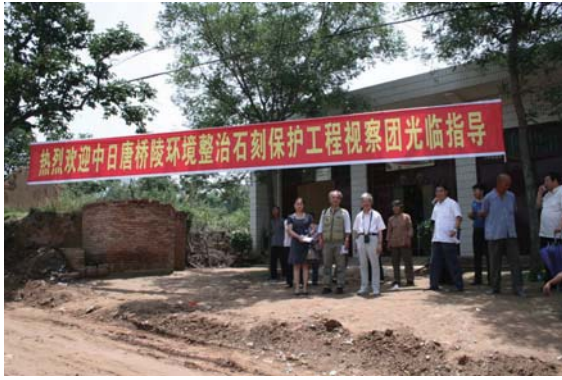
(無形文化遺産部・宮田繁幸)

陝西唐代陵墓石彫像保護 修復事業専門家会議

平成16年度以来、西安文物保護修復センターと共同で推進している「唐代陵墓石彫像保護修復事業」は、今年で最終年度を迎えます。6月23日と24日の2日間、西安市で最終年度の日中専門家会議が開催され、昨年度の作業内容についての検証と評価が行われました。日本からは、西浦忠輝氏（国土舘大学教授、文化財保存）と根立研介氏（京都大学教授、美術史）が専門家として出席されました。昨年度は、事業の対象となっている3つの陵墓のうち、特に唐睿宗の陵墓である橋陵の東西北門での考古学調査と整備作業が進められました。今回は地元民が多数見物に出る中、日中専門家が現地



日中専門家会議



橋陵の現場で掛けられた「熱烈歓迎」の横断幕

視察を行いました。また、去る5月12日に発生した四川大地震では陝西省も被災しましたが、対象陵墓である順陵では南門の獅子像の亀裂に顕著な拡大が見られ、そのため急ぎょ設置された観測装置についての視察も行いました。本事業は11月に石造文化財の保護に関する日中学術研究会を開催し、来年3月に最終の審査会を経て終了する予定です。

(文化遺産国際協力センター・岡田 健)

保存修復科学センター研究会
「三角縁神獣鏡の謎に迫る
—材料・技法・製作地—」

文化財の原材料や製作技法についての詳細な研究から、保存修復やその歴史研究に資する重要な情報が得られます。今回のテーマには、前期古墳から大量に出土し魏鏡か倭



パネル討論の様子

鏡かで論争が続けられている三角縁神獣鏡を取り上げ、材料・形態などの製作情報から製作時期などの歴史情報をいかに引き出すかについて検討しました。

鈕孔形態と外周突線という新しい視点を導入して三角縁神獣鏡の研究に画期的な進展をもたらした福永伸哉氏と、青銅器の鉛同位体比を多数測定し三角縁神獣鏡の材料についての新しい解釈にたどり着いた馬淵久夫氏を講師にお招きし、パネル討論には難波洋三氏、斉藤努氏も交えて活発な意見交換がありました。馬淵氏から三角縁神獣鏡の製作時期について新しい解釈が示され、自然科学的手法を利用した歴史研究の奥深さを理解できた有意義な研究会となりました（2008年6月20日（金）、於：東京文化財研究所地下セミナー室）。

(保存修復科学センター・佐野千絵)

シルクロード沿線
人材育成プログラム

中国文化遺産研究院（2008年2月に中国文物研究所を改組して名称変更）と共同で実施する「シルクロード沿線文化財保存修復人材育成プログラム」は3年目を迎えました。今年は、春から3ヶ月間半、古建築保護修復班（2年改革の第1年目）を実施し、秋から2ヶ月間、土遺跡保存修復班（3年計画の第3年目）を実施する予定です。折しも今年は8月8日からの北京オリンピックを控え、その日程を避けるため、例年よりも早めの4月3日に春のコースがスタートしました。

古建築コースは、新疆・甘粛・青海・寧夏・陝西・河南の各省から合計12名の研修生が参加し、1年目に理論講座と各種調査の実習、保護修復計画の作成を研修し、2年目に参加する



京都造形芸術大学・岡田文男講師（上）と
文化財建造物保存技術協会・中内康雄講師（下）に
よる授業

修復実習作業のための基礎を身につけることを
目的にしています。その1年目の現場実習の場
所には、故宮博物院の支援を得て、故宮内部の
頤和軒東側の一角が提供されています。3カ月
半の期間中、日本側講師10名が参加し、中国
側講師とともに指導にあたります。

（文化遺産国際協力センター・岡田 健）

保存担当学芸員 「フォローアップ研修」の開催

保 存担当学芸員研修の修了者を対象に、
資料保存に関する最新のトピックを伝
える目的で年1回行っている表題の研修を、今
年度は6月2日に開催しました。今回取り上げ

たテーマは、コンピューターシミュレーション
による館内温湿度解析（犬塚将英）、文化財保
存施設におけるジクロロボス蒸散殺虫剤の使用
について（吉田直人）、「カビ対策マニュアル」
作成協力者会議（文部科学省大臣官房政策課所
管）を終えて―「カビ対策マニュアル」の目指
すもの―（佐野千絵）の3つです。保存環境の
予測、生物被害の防止、また資料保存のみなら
ず、職員の健康被害防止は現場では切実な問題
であり、参加者の皆様と私たちの間で、活発な
質疑が交わされました。今回の参加者は66名
と、過去25年の研修修了者の1割を超え、
我々に課せられた責務の大きさを実感させられ
ます。今後も、フォローアップ研修のみではな
く、様々な機会を通じて、最新の情報を提供す
るつもりです。



質疑応答の様子

（保存修復科学センター・吉田直人）

敦煌莫高窟での 壁画調査と研修生派遣

第 5期「敦煌壁画の保護に関する共同研究」
は3年目を迎え、6月1日から4週間の
日程で敦煌莫高窟にメンバーを派遣して、今年
度前半の日中合同調査を実施しました。調査は、
昨年に引き続き、西魏時代の紀年銘（西暦538



第285窟での共同調査

調査チーム（オレンジユニフォーム）と
研修生（赤ユニフォーム）

年、539年）を持つ第285窟について、これまで実施してきた光学的調査とともに壁画全体に対する状態調査を行いました。壁画に使われた材料は、色の種類や技法、描かれた位置など、様々な条件によって劣化の仕方、保存状態が異なります。この状態を把握することで、光学調査の結果はさらに多くの情報をもたらすことになりますし、そこから新たな調査や分析についてのアイデアも生まれるのです。また、特定

の制作材料や技法によって劣化の仕方が異なるのであるとすれば、それは今後の保護修復作業にも重要な手がかりを与えるものとなります。

一方、この調査チームとともに2名の大学院修士課程修了者が莫高窟に行きました。彼らは、昨年度から実施している「敦煌派遣研修員」として、公募により選拔されました。保存科学、絵画制作とそれぞれに異なる専門領域からの参加で、10月中旬までの5ヶ月間、敦煌研究院保護研究所の専門家の指導を受けて、壁画保護のための多岐にわたる内容の研修を受けます。

（文化遺産国際協力センター・岡田 健）

平成19年度 自己点検評価の結果

5月19日に自己点検評価に関わる外部評価委員会が開催されました。当日は、独立行政法人国立文化財機構として平成19年度に実施した事業全般について、その実施状況や成果を委員に提示して説明し、意見をいただきました。後日、各委員の評価や意見を参照しつつ、自己点検評価をまとめました。以下に、東京文化財研究所の事業に対する自己点検評価の結果の概略をお伝えします。

東京文化財研究所が中期目標の実現のために平成19年度に設定した事業は、調査・研究、国際協力の推進、調査・研究成果の公開や情報の発信、国や地方公共団体等に対する協力・助言など多岐にわたります。外部評価委員から最も高い評価をいただいたのは、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画保存関連事業への協力でした。国民が注目する中で、東京・奈良の両文化財研究所は困難な事業を計画以上に達成したと評価されました。国際協力事業では、中国・韓国と

（p.14へ続く）

Column：東京文化財研究所を知っていただくために

東京文化財研究所が取り組んでいる広報活動について、各種の広報誌とホームページ、そして広報誌の入手方法を中心にご紹介しましょう。

まず研究所が刊行している広報誌についてご説明します。

●『東京文化財研究所年報』

『年報』は研究所の年次報告書です。判型A4判、約310ページの本を毎年1冊刊行しています。『年報』では、前年度における研究プロジェクトやその他研究活動、個人の研究業績、研究交流などを報告し、あわせて研究所の機構や年度計画、主な所蔵資料、研究所関係資料などのさまざまなデータも掲載しています。

●『東京文化財研究所概要』

『概要』は研究所の案内です。判型A4判、32ページの小冊子を毎年1冊刊行しています。『概要』では部署ごとに活動をご紹介しますとともに、研究所が行っている研修・助言・指導、大学院教育・公開講座、情報発信などをご説明しています。なお、『概要』は文章を日英2カ国語で併記し、図版を多用するなど、国内・海外、一般・専門の区別なくご利用いただけるように編集されています。

●『TOBUNKENNEWS』

『ニュース』は、研究プロジェクトなどの記事、文化財の研究方法や研究所の歴史などを一般向けに解説したコラム、そして刊行物の案内などを掲載しています。判型A4判、16から20ページの小冊子を毎年4冊刊行しています。

また『TOBUNKENNEWS DIGEST』（『東文研ニュースダイジェスト』）は『ニュース』の英語版です。判型A4判、16ページの小冊子を毎年2冊刊行しています。

これらの広報誌とは別に、研究所が今年度から新たに取り組み始めた子供向けパンフレットについてご紹介しましょう。

子供向けパンフレット『東京文化財研究所ってどんなところ？』は、小学生や中学生などを対象にした研究所の案内です。「とうぶんけんのエンピツくん」というキャラクターが文化財や研究所の各部・センターの活動をわかりやすく紹介していきます。

以上が、研究所が刊行している広報誌です。

つぎにホームページについてご説明します。研究所のホームページは日英2カ国語の版があり、その内容は各部・センターの紹介、各種のコンテンツや利用案内などを掲載しています。

コンテンツ欄は研究プロジェクト概要、研究集会、出版&デジタルアーカイブ、研究資料検索システム、研究リンク集、募集／催し物／入札公告からなり、さまざまな情報を発信しています。また利用案内欄は資料閲覧室や黒田記念館に関するさまざまな情報を提供しています。

新着情報欄の下には『活動報告』（Monthly Report）を掲載しています。『活動報告』とは、日本

語版・英語版のホームページ上で毎月、研究所全体あるいは各部・センターの活動をご紹介しますコーナーです。『活動報告』は研究所の活動を迅速に伝えることを目指して、2007年4月に開設されました。例えば来賓のご紹介、文化財の調査、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画の保存修復、各種の研究集会など、研究所におけるさまざまな取り組みを報告しています。

『活動報告』日本語版 <http://www.tobunken.go.jp/japanese/katudo/index.html>

『活動報告』英語版 <http://www.tobunken.go.jp/english/katudo/index.html>

最後にこれらの広報誌をどのように入手していただくかについてご説明します。

これらの広報誌は、資料閲覧用として各1部を美術館や博物館、大学、文部科学省・文化庁、都道府県や政令指定都市の教育委員会、埋蔵文化財センター、大使館や友好協会などにお送りしています。

なかでも『概要』『ニュース』『ダイジェスト』や子供向けパンフレットは、研究所や黒田記念館でも一般の方々に向けに配布しています。

また広報誌のPDF版はいずれも研究所のホームページからご利用いただけます。

『年報』

<http://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/publication/nenpo/2007/index.html>

『概要』

http://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/publication/gaiyo/index_gaiyo2007.html

『ニュース』

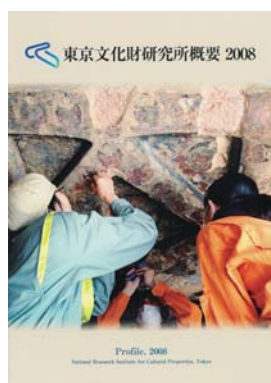
<http://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/publication/news.html>

『ダイジェスト』

<http://www.tobunken.go.jp/~joho/english/publication/news-e.html>

子供向けパンフレット

<http://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/publication/kids/2008.pdf>



『東京文化財研究所概要』
2008年度版



子供向けパンフレット
『東京文化財研究所ってど
んなところ?』

(企画情報部・勝木言一郎)

Column 2



研究所昔語り：美術研究所から東京文化財研究所美術部へ

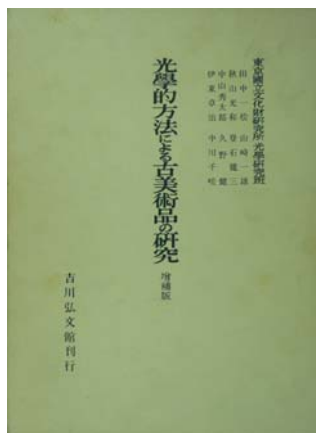


1930（昭和5）年に開所した美術研究所は、戦後の1950（昭和25）年に文化財保護法の制定により同年8月に文化財保護委員会が設立されるに及んで同委員会附属美術研究所となりました。ついで1952（昭和27）年4月には、文化財保護法の一部改正により、「東京文化財研究所」としての組織規程が定められ、この改正により研究所の組織と業務の内容が拡大変更されました。具体的には、それまでの美術研究所の業務は、美術部に引き継がれ、新たに芸能部、保存科学部が設けられました。美術部では、第一研究室、第二研究室、資料室と3室構成になり、戦前からの研究業務を継続発展させる体制となりました。さらに研究所の名称は、1954（昭和29）年9月に「東京国立文化財研究所」となり、1968（昭和43）年6月に文化庁発足に伴い、その附属機関となりました。

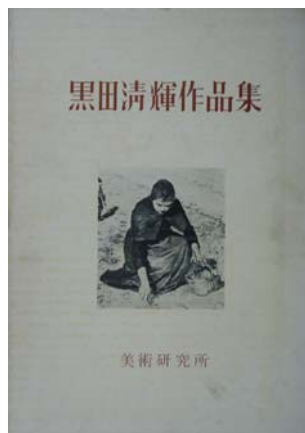
さて戦後の美術部の研究活動を、美術部資料室が発展し情報資料部として発足する1977（昭和52）年4月までの約30年間を中心に振り返ってみたいとおもいます。（なお、情報資料部の誕生及びその後の活動については、前号掲載の中村節子「研究所昔語り：情報化の礎」を参照されたい。）1973（昭和48）年に『東京国立文化財研究所20年のあゆみ』という冊子が刊行されています。美術研究所創設から20年の業務活動を総括した内容です。そのなかで、戦後の美術部については、つぎのように記されていました。

「美術研究所は機構上、また名称の上で右の如く変更されたのみで、従って美術部は、従前通り、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料の作成、蒐集、整理し、広く研究者の利用に供し、美術の学術研究のための資料センターの役割を果たしつつ現在に及んでいる。」上記のような美術作品、文化財に対する広範な領域に対する「基礎的」、「専門的」研究を遂行するなかで、とりわけ戦後の研究の「特徴」のひとつとして、「光学的諸方法による研究の発展」があげられています。これは、現在でいうところの「光学的手法」による研究で、当時は「光学的鑑識法」と称され、X線、紫外線、赤外線、顕微鏡、 γ 線等を用いて彫刻、絵画、工芸、書蹟等の美術作品を調

査しようとしたものでした。この研究法は、斯界では先駆的なもので、当時の美術部所員を中心に所内外の専門家の参加を仰いで「光学研究班」が組織され、その成果が『光学的方法による古美術品の研究』（昭和30年）として刊行されました。その後も人文学としての美術史に、こうした科学的な調査を加えた総合的な調査研究の実践がすすめられ、その成果の代



『光学的方法による古美術品の研究』表紙



『黒田清輝作品集』表紙

表的なものとしては、高田修編『醍醐寺五重塔の壁画』（吉川弘文館、昭和34年、学士院恩賜賞受賞）、当研究所報告（高田修、秋山光和、柳澤孝）『高雄曼荼羅』（吉川弘文館、昭和42年）などがあげられます。

また、その間には個人研究ながら、『美術研究』での論考を中心にまとめられた秋山光和著『平安時代世俗画の研究』（吉川弘文館、昭和39年、学士院賞受賞）など、今日までその成果が高く評価される著述も刊行されました。基礎資料の集成編纂という面では、『日本美術年鑑』の継続的な編集刊行とともに、約40,000件の文献情報を網羅し編纂した『日本東洋古美術文献目録 昭和11年～40年 定期刊行物所載』（昭和44年）をまずあげるべきでしょう。

一方、近代、現代美術に関する研究面では、この時代に何よりも黒田清輝研究が、格段に深められ、その成果として、東京国立文化財研究所編『黒田清輝作品集』（昭和29年）、隈元謙次郎編『黒田清輝日記』（全4巻、中央公論美術出版、昭和41年～43年）等が刊行されたことがあげられます。これは、美術研究所創設の契機をつくった画家黒田清輝について戦前からはじめられていた研究の継続に基づくもので、いずれもが今日でも、黒田研究にとっては欠くことのできない基本資料となっています。

こうした研究の深まりと広がり、研究者向けばかりではなく、ひろく一般にむけて講演会という形で公表されるようになったのもこの時代からでした。開所記念日（10月18日）の記念行事として所内における美術展覧会の企画とともに始まったのが1953（昭和28）年からで、これは1962（昭和41）年から「公開学術講座」となり、現在の「オープンレクチャー」として引き継がれています。また黒田清輝に関する展覧会も、1954（昭和29）年に国立近代美術館との共催で「黒田清輝30周年記念展」、さらに1965（昭和40）年にブリヂストン美術館との共催で「黒田清輝生誕百年記念・黒田清輝展」が開催されました。現在、毎年一度、各地方美術館との共催で開催している「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」がはじめたのは、1977（昭和52）年からのことです。

このように美術研究所創設時からの継承ではじめられた戦後の美術部の各研究、事業等は、現在の

企画情報部に引き継がれ、さらに、これまで上げた成果を基盤として新たな課題にとりくみつつすめられています。今日の文化財保護を目的とした基礎的な調査研究、また先端的、実践的な研究の進展という面から、戦後の美術部は大きな基礎をつくったといえましょう。

（企画情報部・田中 淳）



『高雄曼荼羅』より

の間に成熟した協力関係を発展させつつあること、カンボジアやアフガンなどにおいて、困難な状況下で支援を発展させたことが注目されました。また、研修の実施や積極的な助言等によって、各種の文化財に関わる人びとの知識や技術のレベルアップに寄与し、人材育成に貢献したことも高く評価されています。しかし、それら事業の成果が国民に十分に伝わっているとは

言いがたい面があり、情報の発信機能をより高める努力が期待されています。

自己点検評価を行った結果、平成19年度のすべての事業は順調に実施され、十分な成果があがっていると判定しました。自己点検評価の結果は、今後の事業計画の策定や法人運営の改善に反映させます。

(副所長・中野照男)

新任のご挨拶



●無形文化遺産部・菊池理予
2008年5月1日付で無形文化遺産部に着任しました。専門は染織文化史です。大学・大学院においては、沖縄の絣や

能装束、名物裂等の技法や名称の変遷を対象に研究を進めてきました。

入所後は有形文化財を対象とした研究から、その有形文化財を作る技術そのものである無形

文化財の研究へと対象を変え、研究手法の手探りの日々が続いています。今日まで脈々と引き継がれてきた技術の伝承のための基礎的研究、またその技術自体の保存にも積極的に取り組みたいと考えています。今後は無形文化遺産部の工芸技術の研究員として、染織のみならず工芸全般を幅広く理解できるよう努めていきたいと思っています。

皆様のご指導の下、東京文化財研究所における業務の一つ一つを糧として成長していければと考えています。何卒、よろしくお願い申し上げます。

東京文化財研究所人事異動

●平成20年7月1日付け

採用：文化遺産国際協力センター主任研究員・友田正彦（新規採用）

文化遺産国際協力センター特別研究員・秋枝ユミイザベル（新規採用）

文化遺産国際協力センター特別研究員・邊牟木尚美（新規採用）

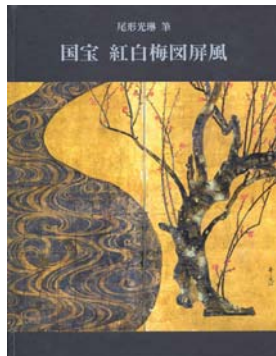
文化遺産国際協力センター特別研究員・島津美子（新規採用）

文化遺産国際協力センター特別研究員・鈴木環（新規採用）

●平成20年8月1日付け

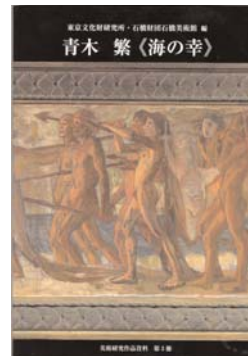
採用：保存修復科学センター任期付研究員・坪倉早智子（新規採用）

刊行物のご案内



『国宝紅白梅図屏風』

江戸時代の画家、尾形光琳の代表作である《紅白梅図屏風》(MOA美術館蔵)の最新調査成果を盛り込んだ報告書。科学的分析手法を用いて技法の謎にせまり、その結果は学界や関連する分野に大きな問題を提起しました。2005年、中央公論美術出版(03-3561-5993)定価26,250円



『青木繁《海の幸》—

美術研究作品資料集第3冊』

明治洋画の代表作、青木繁《海の幸》(重要文化財、石橋財団石橋美術館蔵)が誕生百年を迎えた2004年、同館と行った研究の報告書です。高度な印刷技術を駆使した口絵31頁。論文と研究資料など本文108頁。2005年、中央公論美術出版、定価12,600円



『無形文化遺産研究報告』2

無形文化財・無形民俗文化財・文化財保存技術等を研究対象とする無形文化遺産部が、毎年研究成果を報告する研究誌として平成19年度に発刊しました。なおその全内容は、無形文化遺産部HPのPDF版で全文公開しています。



『文化財害虫カード』

"IPMワークショップ2004"で考案された教材(虫名刺)をもとに作成した害虫カードです。「文化財害虫事典」に準拠した主要害虫33点のカードは、切り取って保管できるほか、裏にはメモ欄が設けてあります。博物館等の現場でご活用いただけますと幸いです。2007年、(株)クバプロ(電話:03-3238-1689)、定価600円



『未来につなぐ人類の技4—鉄道の保存と修復II』

「未来につなぐ人類の技」シリーズの第4巻目。鉄道関連施設の保存修復の国内外における実例を調査し、その実際と問題点および解決の試みを紹介します。2005年、エディトリR(03-3793-6640)



『シルクロードの壁画—

東西文化の交流を探る』

2006年1月に開催された「シルクロードの壁画」国際シンポジウムの報告書です。2007年、言叢社(03-3262-4827)、定価6,800円。なお、本書の英文版も出版されています。Mural Paintings of the Silk Road: Cultural Exchanges between East and West, Archetype Publications, ISBN: 9781904982227 £39.50/\$85.00

外国人来訪者

年月日	来 訪 者	目 的
20. 4. 2	台湾国立台北教育大学文教法律研究所（6名）	研修
20. 5.13	国立韓国伝統文化学校（4名）	調印式
20. 5.22	中国河南博物院（2名）	研修
20. 5.28	ベノイ・ベルル氏	講演
20. 6.13	上海大学芸術研究員（6名）	表敬訪問・視察

管理部・崎部 剛

黒田記念館公開日カレンダー

●公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料

特別公開：上野の森文化ゾーンフェスティバル期間中につき、10/28（火）～11月3日（月）は、午前9時30分から午後5時まで開館しております。

October 10							November 11							December 12						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4							1		1	2	3	4	5	6
5	6	7	8	9	10	11	2	3	4	5	6	7	8	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30	31		23/ 30	24	25	26	27	28	29	28	29	30	31			

ご案内

●黒田清輝のフランス留学展

会期：2009年3月3日（火）～4月12日（日）、会場：東京国立博物館・本館18室

今回で第3回目となる黒田清輝作品の特集陳列は、留学期の作品を中心に展示します。黒田は法律家を目指して19歳でフランスに渡航しますが、9年後には画家として帰国することになります。画家黒田清輝はフランスで誕生し、成長したのです。このたびは、初期のデッサンやサロンで初入選を果たした作品《読書》など留学期の諸作を紹介し、黒田の画家への歩みを跡づけます。また、東京藝術大学大学美術館のご協力を得て、師コランの作品や、留学中に交遊のあった日本人画家たちの作品もあわせて紹介します。是非ご覧ください。

編集後記

●第34号では、2008年4月から6月までの活動を記事として掲載しています。モンゴルにおける拠点事業をはじめ、さまざまな取り組みが新たに始まりました。これらが今後どのように展開されていくのが楽しみです。

(企画情報部・勝木言一郎)

TOBUNKENNEWS no. 34

発行日：2008年8月31日

独立行政法人国立文化財機構

発行：東京文化財研究所

印刷：よしみ工業株式会社

編集：企画情報部